通信全覽二編

類輯五十一

百四十三

六百廿九

内閣文庫
番號 和 33005
冊數 303 (260)
函號 184 271

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

六十五番
秘閣圖書之章
日本政府圖書
内閣文庫

類輯巻之五十一　ナタール　創傷之上

申九月

ゴロフニンサマヘ
シヨカンヲ　モツテ　モウシアゲ　サムラフ　セヽジツ
ツキソヘル　オヤクミヲ　コノホウヨリ　コトワ
ルコト　アリ　サムラヘドモ　イーズレワ　ワザワイヲ
マヌカレル　タメ　アナタガタヨリ　シバーヽ　ウケタ
マハリタル　ラン　ノリミヽ　シタガワテ　ワガ　シクジエ
ツメ　アイーノ　ヤクミノ　ゴツドーヲ　トウジコトワ

ラズ ヨーニ ワガ カンノ ハタバンノ ヤクニモ
モウシツケタル アイダ カノ ヒトハ ワガ
ジウグワツ サク サンジウニチノ ヒルスギニ
アタリテ カナガハ オモテヘ カヘルヤウニ シ
タク イタシテ タヾイマ タヽントスルトキ
ワガ ヱドノ シクジノ モンノソトニ キコクノ
ゴセイフノ オヤクノ イクニント トモニ タチ
アイ カタル トコロニワ タチマチ ニサンサ
シタル キコク サムライ イチニンワ トウ

リノナカ ヨリ キウニ ワガ ハタバンノヤク
ニ ムカイ チカズイテ カロンズルカオ シテ
ベツノ コトバヲモ ツカウテ 子ライマスコ
トコレアリ サムライ ソノトキ キコク ヤク
ヤク ヨリ カノ ワガ ヤクニ ミダリニ ム
カウ ヒトヲ ナルタケ トメ フセガント セ
シメ サムラヘドモ カノ サムライハ チカ
ラヲ イダシテ ゴセイフノ オヤクノ イク
ニンヲ カテ ツヅケテ スミヤカニ ダイトウヲ

ヌゲテ フタツノテヲ モツテ ワガ ヤクノ
アタマニ イレテ コロスニ イタル ヤウニ キツ
ク ウチタルトキニハ ワガ ヤクハ ハヤク シリ
ズイテ ウデハカリニ キラレテ ゴセイフヤクノ
ヨリ トリシツメル ヤウニ カタナヲ
ヌゲモチイザルコト コレアリ コテツポヲ ザイ
ニンニ ムカハシ ハナセヲ コヽニ アツメタル ミシ
ズノ ナカヘ ザイ ニンヲ オドロカシ ニガ
セシコト コレ アリ サムラフ スマノトキニ

アタリテ サイニンハ トラレ オリ サム
ラウカト コノ おウニ オイヲ ワカリ サムラ
ワザル アイダ ソノ モトヨリ キヲイレテ
ザイニンヲ オタンサクリシメル ヨシヲ オヤクノ
ヨリ マウスイアウラベシラールハ ウケタマ
ワリシ コト コレ アリ サムラウテ オモウ
ニハ ザイニンヲ トメ フセガントセシ オヤクヽニ
オイテ ザイニンガ キイタル カミシモノ
モミニ ミツケマシテ イワレノ ダイミヤウ

サマノ ケライ コザ サムラフカトイ
サイニ ミイダシテ トカク サガシダ
シヤスウ ゴザサムラウヅト ソンシ サム
ラウ コレガ ホカニハ オマチカクドヽナドモ
コテツポノ コエノ キヽテ ウウバン
ヨリ スミヤカニ オコリ イデマシテ ヌゲ
ラレタル カタナヲ テニモウテ ニゲル ヒ
トヲ ミサムラヘバ ソノ アトカタニ
ツケタル コト アル ベシト ソンジ

テ
タイクニサマノ ゴセイフノ ジンギ カツ
ダウリ ジヤウヤクノ ホニイ トウヲモ
モツテ ミギノ ウミニツキ イマヽゼノ
タンサク イタス コトハ ナシノ コトニ
トヽキ マシ タロウ カト ウシレラシ
ナサレタク コヒ子ガイ サムラフ カツ
ミギノ ヨシヲ ウケタマワル コトヲモ
ウテ イマノ アラタノ ツミヲ ヒリダ

レツノ ツウウノ ケバツニ アハスヤ
ウニ キコリ ゴセイフ ヨリ ナニヲ
ウン イタセレ ゴザ サムラフ アト ワタク
シニ オテテ アイ ハカリ オヨビ ワ
ガ セイフニ オイテモ アイ ハカラセル
コトニ タレルニ オヨブ ベク サムラフ
ハイグ キンゲン
一千八百五十八年十月三十一日
ドセニデ ベレクル

申十月廿七日至

佛蘭西ニヤルセダフアール
アヰセルレニレー
ドセニデ ベレクルド
其許ゟ十月三十一日附ニ 差越
候書翰 拝見 其国 領事役 ナタ
ール儀 ニ而 兼而 申越 在之候処

去ル未年取結候條約
親睦之義ニ付御使節を
差遣し候處其方之
政府ニ而安全ニ取扱
不日歸着致せり其節諸
事周旋ニ而應接ニ及候段
厚ク深ク感謝致す右
之為ニ右之趣貴答申進候
謹言

萬延元申年十月廿日

脇坂中務大輔

安藤對馬守

申十月十三日夕返

コタウヂユウサマヱ

キコク 十月七日ノ ゴシヨカンヲ ラクジ

ヒケシ セシメ サムラフ ワガ ハタバン

ヤクノギニツキ ゴコウイヲ アリガタキ

ギト ソンジ サムラヘドモ ヲボシノヽレトウ

リニハ フコウニシテ イマダ ゼンクワイ

イタサズ　サムラフ　キツグナハ　ヒヽカタ
イエ　サムラヘドモ　モトヨリ　フカキヅニ
テ　ホ手マデ　ヲヨビ　サムラフエヘ　イタ
ミ　サラズ　ソノウヘ　テヲ　ツカウ　コトカ
ナワズ　サムラフ　モツトモ　アナタカタ
ヨリ　ザイニンヲ　タヽサクカタヘ　サシノ
イレ　クダサレ　アリカタク　リンジ　サム
ラフ　ミギ　ザイニンハ　トラカラズ　イデ
ヤスキ　ギト　リンジ　サムラフ　ヒカシ　モウ

シ　アゲタキ　ギ　コレアリ　サムラフ　ソノワケ
ハ　所ヽヨリ　ニキヽ　ヲヨブニハ　ナヲ
コノウエ　ワカ　ハタバシヤクニ　アタセヒトスル
モノ　アルヨシ　ミギノ　モノハ　センタツテノ
キヴラ　ヲヽワセ　サムラフ　モノヽ　ドヲ
ルイノヨシニ　コレアリ　サムラフ　モシ　ソノトウリ
リナレバ　ナタールバ　タレカナルヒト　ナレド
所ヽヨリ　アヤウシト　キヽヲヨビシ　ユヘ
コノ　アヤウキ　ギヲ　マヌカルル　ヨウ
イクスハ　ワガ　シヨリブンナレハ　シバラ

ク　エド　レクジエ　カヘサスヤウ　イツス
ヘクト　ソニジ　サムラフ　ワタクシノ　ギ
ヲ　マウス　ナレバ　エド　レクジハ　ア
ヤウクドモ　ワカ　セイフ　コリ　ナイラ
ウケクル　アイダ　シラ子バ　ナラズ　ソレ
ニヨリテ　ワタクシ　ワガフゾクノ　モノモ
アヤウキ　コト　ナキヤウ　ゴセイフ
ヨリ　アツクノ　ヲセハ　コレアル　ベクトヲモ
ビ　サムラフ　ハイグ　キンゲン

千八百六十年十一月二十一日カナ
ガワニヲイテ
[illegible]

第十七

申
九月廿三日於正泉寺竹本図書頭島居越前守
佛國通弁官ミラートルト對話

一 此間ハ十ダールニ而不慮之事有之候事実ニ而右ハ全ク浮浪之氣之毒之次第ニ候所如何御取計候哉委細承度候

一 先ハ御吟味之處最中ニ候

一 其節附添之者共有之候哉

一 當所ゟ附添之役人三人罷出候得共

第十七

一 阿蘭陀人来舶之節其場所ニ居合候ハヽ
早速可申出候
一 然ル上ハナタールニ而其所附添候者之名前
認メ差出可申候
一 名主之変事有之候節ハ名主相知り可申哉ニ
一 其附添役人共之動静相知リ候上ニ居合候ナタール
引合候上ニ而右取計リ候事と申候
一 右様之事ニ候ハヽ申出可申候
一 其所宿方詰役人共ゟ変事之趣訴出可

方ニ而中止成候早速可相成哉又ハ是等神奈川表ニ
而相成哉且右様之取扱手続之事成丈相
越候
一 其外雑有之候ハヽ神奈川表ニ而相成
哉又ハアールコツク右留ニ而変事哉
承リ置候上ニ而避ケミヤルゼダフヘール立合候ハヽ
哉ニ雑并府ナタール儀様ニ相成
候者も由之国人共ニ相成哉ニ付何分
難急候ニ付ナタール一同神奈川

表ゟ罷越申候

一 右羅人共相知き申哉

一 去夕承知仕不申、當時在調中承知仕候

一 右之儀ニ付而在押人易き、事ニ而其在之濟梅寺門前ニ而、右頃迄ニ而内ニ而込切り付候在之

有之候

一 其節之附添之者有之ニ付防留可申候哉、其済ニ右相見候、是迄之私共之附添之者

不相済之事在之趣しこの中申上候所御儀、附添共ニ付而跡を探索仕居候得共、右之方ニ而彼是ニ説教を致すへきニ付、無之ニ付探索方甚以ニ而其當時御調中ニ御座候

一 其節羅人之上下着用致し居候、皆高キ方ニ御座候

一 其節之衆取り扱尋問等罷越候

一 十タール之中ロ之方ニ而附添共之候得共、右済之

一 宿寺詰役人ニ而も其もの中立ニ而も附添無之
他出を申付有之其場所踏越ニ而ハ
申ニ而も其段取建ニ而も差留候
一 表ニ而ナタールニ而辞を申述居候
いまた處置不審を起し候ニ付附
添之者一同宿寺江召出差出無之
一 ナタールニ而何ト頼ニ候哉
一 ミヤルゼダワヘール一同協議可致哉
一 何ぞ頼之候哉

一 亜国軍艦横濱江渡来致し居候付
本國江差出し候書翰出来次第相托し候上ニ
帰府可致候
一 前条之處ニ而者附添之義ナタールニ而
宿寺詰役人ニ而も其趣之附添致候儀ハ
有之候哉
一 其返事ニ而ハ今以前ニ者ナタールハ一同
役人門前ニ而差出申談し居候由ニ
右之ナタールハ申付候処私ニハ信用

致し其通り入候得ハ其者もナタル候
平生偽りをも申たりとも不申者ニ
有之候

一 右相察候ニ付有之候而ハ右先頃より附添世
之候ニ付鎮念致し候当前ニ而一人ニ而罷
出候

一 附添之者有之候而ハ右外ニ相立
又ハ甚證無之候

一 右察とも何より罷ニ初起り候哉

一 ナタールカ中守ニ於て者役人一日門前ニ而ニ罷
出相語し於候処正原之方ニ而
士壱人ニ召越ナタール段正視し去門
え寸ニ進ミよりナタールの側ニ居り相
大を蹴倒しとて役人之者何者ニ
右相尋候処ナタール一円承引
於処右士人大ニ憤り刀抜切付
ケ候處発砲致し候故未多鋭候
不定ニ中ル於換し申候右士人相失ル

跳倒し候ニ付役人共制し候得共
其場ニ居合候者共ニ而も右之
一 宗門諸役人共も炮声ニ驚き飛出し候
中候由
一 其通りニ而候とも宗門諸役人へ是私
届ニ無之候得共右様之事ニ候
一 刻限ハ何時頃ニ候哉
一 六ツ時少前之者ニ候 其後私宿ニ而
居り候

一 十タールと申候ハ府ニ而上稲漢字一ツ之由ニ而右相答度
事ニ付左之通申上候 其訳ハ以来浦海之者共
候ハ其候ニ而諸役人へも申付候
附添之者共ニ而ハ相心得候家ハ
一 私共より兼而申付置
一 神崎門ニ而船之上ニ而ヤルセダフヘールと申候而
宗門役人ニ而も相違無之候
事ニ付見候ニ付罷在候役人へ右知せ候様
此度右役人へ申付置候居り候上ニ而心得

一此表合衆国政府ゟ申出し候旨
申諭し申上候趣
一ミヤルゼダフベールか画ニ而申付無之候ハゝ
差し置ニ有之候ハゝ段々方より
早まり事を仕出し候哉諸方ニ而
破裂ニ及ひ候時ハ面々刀を抜ハ或は
鉄炮を出し切付申候節ハ多し
打拾置候得ハ居候者取扱ニ而通り
兼し候趣ニ御座候

一甚しき事ハ早ク進ミ候得者ゆへ相成ニ相成甚ニ
砦し込ミ候頃先キ鉄炮ト其まゝ様ニ而
蒔ニ相成候切り懸ケ一事ニ当り鉄ニ之事ハ
有之候ニ先キ鉄炮或ハ其中より盛んニ而
切殺し候得ハ無見分候殊ニ其日本ニ
所々ニ有之候ハゝ尚更ニ之ニ而相済候ニ而
鉄炮を向ケ候而又進ミ候而只無事ニ
一甚しき者ハ相成ニ候

六十六番

申九月廿七日ニ落手

千八百六十年第十一月廿日神
奈川ニて
日本ニ於る佛蘭西コンシユール
ドゥ子ーヌル殿より
外国事務宰相ニ差出したる
始より此般先之掲 第十月
三十日ニ我使臣殿の護衛

殺害せんと為せし事ニ就
而ハ余公けの此件を扱ハん
事を決せり余ハ事實を略
述せハ諸件を閣下ニ通知
せ然し彼今ハ日本政府の
諸士事ニ就而ハ云へる如
使臣館諸会の役人ヒスト－
ル外殺せし時ニ於て其
傷を受けし後世を去る事

ニ有りしと其の事實を
余が第十月二十一日の書簡中
ニ記せり政府の諸役人
其の説ニ依り我が官
使ニ危害を加へし古賀哉
此定し近き未だ起る事
生を察めるとも其の士
民ニ思ひ説し其果して其
○我ハ議論ニ余が由て

余しおける旅をうつして彼
の襲ひ人は去りて掛るを
見ざる前より其下にありて手に
取らんとして彼の籠手の
手放せし時に取りて剣を
帯びたる従者あり 曰 殺害人
を突弾し中らざる手に聘ひあり
此者とあるが彼者と人の群
集中に逃還もして其の跟跡
追ひ届かんがためなり 曰 我が籠手
を掌羅の者を打たんと手にて怒
もとより殺害人に前二の手放を
持たず又 余政府の士官
のいふる一説出り 非難を受けし
是を当ぶ殺害の従則として あり
彼は二小児の鉄を所えて手
ありでありす法り 曰し 余が
籠手の大殺害人とり 怨[怒]を起

さしもしを嘆息もせざる事
なしと
政府にては此の如きき事
あるに由りて件の事實をたゞ
しらしめ所をも古の大を安然
と定めたる人の信例しをして仕
法彼となりて幸運の安危なる安
右乃同り指ありて又殺害人
此の当石乃味あるを殺人と云ふ事

人許乃賃其乃掛りを通過也
てを安せりを是を以て其の
犬を一匹に吠へし事ありけ
れども殺害人を政府の役人
の服務をなし顧せず其の当石宗
あるが出人を地こて其れ故
なりあり
此の折に其の殺害人を意て
此の思ひをなせんと決心せし

右ある廻し口状の殺害人
まぎれ様を與へんと欲する人
の如くに寄り年ひさしく起き
残を求め御めさせ其の大なり
萬向せる御信ありとかり之並に
向ひて後に是始まりし其の
主人なりと行ひて縁せし口状
の半ありがたし當初に宗を
殺せし右を金が籠めして河なり

役所向の役人ありて作し
此の役人を彼の殺害人
なり其の行ひて禁止しをん
一、の其の右生あなり起こさ
せし時とて止め捕ふ止めあり
此の時役の殺害人を謝
後殺しに慶し處人と
いへる役人熟知の役を殺
しれ人の右を捕へ降せ

甲鐵艦にて忽笑ひ給ひ
意外なることなり
余が今迄に心得たる所
の事實は人の皆知る如く
政府役人の居ざる時より起
り又は無禮をなさゞる小丈夫の
如くしたり面に出せると
此の事なりしは御國家なる陸
しと思ふ人恐惶敬白

佛蘭西國全權のコンシユル
ゼネラール
ミユセンデ ベルクール

申九月廿九日受

ニッポンゴラフヂウ サマヱ

ヱヨカンヲ モッテ モウシ アケサウラフ ワガ

十月廿日 ワカ ハタバンハ キヅラ ツケラレ

キニツキ ガノ コク ゴブキヨウサマ ニミント

モスイアウラベビラールト アクレ タレゴウノ

オモムキラ ドフニシ ヨリ キヽタル コト

コレアリ　サムラフ　ミギノ　ダンゴウノ　ウチ
ゴブギヨウサマノコトバニ　ハタバレ　キラレシトキ
ヤクニミ　イククタリ　ツノ　トコロニ　クルト
ゴブギヨウサマニ　タノイテ　ゾンゼザルガゴトクシテ
ハタバン　ヨリ　ミギノ　オモムキヲ　マタタビ
キヽマセヌ　ユヱ　ミギノ　ヤリニミヲ　ミイダシ
ガタレト　モフシタリ　シカシナガラ　ワガ　サニ
ヌル　十月　三十一日ニ　アクッテ　シヨカニヲ　モウ
テミギノ　オモムキヲ　ツマビラカニ　アナタガ

タヱ　スデニ　モーシアゲシコト　コレアリ　サム
ラフ　コノウヱ　トモ　カクモ　セイフニ　オ
イテ　カイコク　イシ　カンニ　ツメ　ヤイノ
ヤクヤク　名　カツ　ツイ　シヨギヤウモ　ゾンゼ
サルトハ　コノ　ホウニ　オイテ　シヤウチ
イクメシカタシ　シカリトノヱドモ　ミギノ
ヤクミヲ　ケイバウニ　アハセタ　キギヲ
子カハズ　タヾ　ミキノ　ツミノ　ヨシヲ
イサイ　ミウケ　サムラフ　コトノ　ハシメヨリ

コトヲ　マヌカルヽ　タメ　ザイニンヲ　トノフセ
ガントセシ　トフニヿ　メイテイヲ　イキヨク
ミダスベク　ヱ
タイクンサマノ　コセイフヨリ　ミキノウミヲ
ヨコシマナク　テタベシ　アル　ヨウニ　ウツタヱヿ
コトゴトク　モウシ　アゲベク　アイダ　ニ
ギノ　ウミニツキ　ヨコシマ　イツワリナク
シニジウノ　ワケヲ　モーシ　タテル　ヨウ
ニ　ユルシタク　コイネガイ　サムラフ　ハイ

クキニゲン
一千八百六十年十二月七日
御家和本書の学る
トセンデ　ベレクル

申
十月六日着

甲必丹ヤルゼダッヘール
エキセルレンシート
ドセンデ ベンクルロ

貴國第十一月廿八日七月附之書
翰到来之処以後ニ此ノ書翰
附候以顯當之存右ニ應シ御答之

当之節に付彼等所為之事件
情を申立且又は聢と実
ずるに趣意書并ニ出奔之
之者は其子細に応し夫々
又は探索之者殺人致して
押して事情聞取而已に
以書状難当之儀に附
拠之役人多人数差合
せしめ候得共十分之如く

其節浪士共出し而右之儀
致居合せ之もの共附添
不埒之趣を意ぞ其事一刀
之後に於て何之申分而力を
尽したりしまゝ御糺し候
之に尊卑之勝合且補尚
し得たるも候に探索情
為其事之如く我政府外
出人之条令甘之趣意に

将軍家より安人之御尋として被遣
候处殊鍛錬に付数年之修行
者に候得者いつれも御尋之上
にて褒美之儀被 [illegible] 申渡候
申上候様に可被相心得候
且者又其儀ハ被仰出候哉
之旨被相尋候ニ付有之候右
之趣可被為承知候
[illegible]

第十八

之旨可被申達候
寛文八年申十月廿三日 稲葉美濃守
阿部豊後守

第十八

申九月十九日於東禅寺堀織部正[illegible]英国コンシユル
アールコツクト對話之内

一 [illegible]
[illegible]

一 [illegible]
[illegible]

一 佛人[illegible]
[illegible]近[illegible]
[illegible]

人足稼ニ出候ハヽ其日ゟ其所之近所ニ而稼可申事

一 旅人并他所之者逗留為致候ハヽ
　頭之仕人ゟ其者之年を聞届置可申
　店借人共他出候ハヽ役人へ相届可申候
　店借之者共外出ニ付相届可申事

一 此ものは其所之名前并敷金等相改可申
　切支丹宗門之儀其所之名主相改可申
　之事右之通可申事

一 毎月人別等相改候得ハ保証いたし

　早々相届可申候

一 諸人之役人并家主相守可申其所之名主ニ而届可申候得共
　其段相届可申候

第十八

申
十月廿三日於正泉寺竹本図書頭寓居
越前守淺野一學佛國通弁役ジラルに對話
之覺

一 シヤルゼダフヘールよりハいまた急ニ帰帆不致
候哉

一 神奈川より今朝書翰到来仕候
處近日之内帰帆致し候様
申越并兼而出勤度ニ別當も
其節連れ頼り来候よし

第十八

中裁ゟ返保別當ニナタール
怪我ニ付立場ニおゐて居合ニ不
申候ニ付居合候
一右ニ付當惑ゟ御尋及吟味ナタールニ不意ニ
節其立場ニ不居合右當人ゟ口上ニ而
承り候ニ付可有之候

十四番

申
十月廿八日差出

佛蘭西通弁官
エスクワイル
ジラール

此度御尋申上候ナタール瀬兵一件ニ付御掛合
振合ニ而者別當吟味いたし度旨此程
無之候ニ付中ニ入へき者壱人シャルセダフへ
トル神奈川表江召連出候振合ニ候

其御沙汰何レニも其筋ゟ為申合候も
自然遅延ニおよひ不申候し此段為念申入置候
謹言

萬延元申年十月廿八日

溝口讃岐守
堀織部正
竹本図書頭
酒井隠岐守

十五番

申十月廿九日差越ス

ガイコクゴブギヨウサマヘ
キコク十月廿五日ミヅグチサヌキノ
カミサマノギニツキオヨビ十月廿八日
サルゼダフヘールノベツトウノギニツ
キテノゴシヨカンシニツフラクシユセリ
ツノム子ヲサルゼダフヘールエモフミ
タツコトコレアリサムラフ

下略

一千八百六十年十二月十日

ミラール 捺印

十月廿五日ニ当ル書翰敘位報候事ニ候

第二

申十一月十六日對馬守殿御宅ニ於テ佛蘭西ミニストル
ゼダフスヘール并軍艦總督江御對話之内

一 先ツ方ゟ申上候

先日府中門番騎兵之内日本在任附属之
者之罪ニ而去ル日被仰候於其場所（仏蘭西人ニ而疵付候者之儀政府ニ）
疵為負候者其之者探索之方ニ速ニ取リ
於当方ニ而も別而政府ニ而見込居召取り置
右之者召捕之上無常之刑罰ニ處せ

其二

此趣承探致し候

一 右之先達而申上候以書翰申立候儀ニ而
支那政府受取承附添之者中口ヲも相違
有之候義ニ付右附添無人之者共私ニ役ニ致
無之儀ハ右無拠有之者は其之召捕ニ相成候
一 右様為召捕候者は召捕方ニ而も夫々之義ニ付
政府之法ニ而も無之趣以て法召捕之様
之由ニ而申上候得共可申入哉之由探
索致不申候様相成候

一 右之其筋ニ而申遣し難く探索致し兼候得共
於清国ニ而其罪状之儀ニ而申鄭郎ニて確と之申
中候ニ付英吉利ニ而も相ニ上候外党与申
我国ニて大老職ニ而乱妨相成候然ルニ残党之
有之由ニ付其節召捕ニ相成候得共其後ニ而も其
国之事情ニ付如何之事知れ不申候ニ付我国之
事情ニ付右之様ニ事情ニ而右大老職之筈
事情ニ付対し其罪人迄右様之儀ニ付候得共
其之筋之事情探索ニ及兼候趣致相聞候

一 右病氣ニ而居早ニ付召捕不成候節ニ
刑科ニ及ひ候而ハ政府ニ於而詮議仕
有之候とも迚も是則右無親之證を
表し候事与存候

一 素より探索方之者ニ申付置候而召捕
候儀ニ上申之上ニ而刑科ニ處シ可申右政府於て
心配以為し候様儀ニ有之候

一 唯今中上於候而者当表難叙之者不
都合生し一事無之与存し候事ニ而

一 此方より之儀同様之事ニ而右者猶更探索ニ
為差支無之候
手先差出し居候

内閣文庫

日付書二所収
名を記して
篤く持来の

国立公文書館
National Archives of Japan